

---

## 魔法先生ネギま! ~ FT厨二病降臨 ~

S P E C 100%

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法先生ネギま！〜FT厨二病降臨〜

### 【Nコード】

N8625Y

### 【作者名】

SPEC100%

### 【あらすじ】

「魔法先生ネギま！」の二次小説です。短い生涯を終えた主人公が神様からのご恩を受け「ネギま」の世界に転生する。そこでフェアリーテイルの魔法を使って原作ブレイクしていきます。魔法世界編から原作介入します。始めからではないのでご了承下さい。

オリキャラ出てきます。主人公もオリキャラです。「FAIRY TAIL」のセルフパロディやネタ、魔法（さらに自分で強化した魔法）が出てきます。またキャラも出てきます。オリジナルの魔法が出てきます。中傷や批判は控えて下さい。キャラ崩壊して

いると思います。 自己満足で書いています。 更新は不定期。 それでも、よろしい方は読んでみて下さい。初めての小説なので、未熟で駄文ですがよろしくお願いします。

## 最強の厨二病爆誕（前書き）

駄文ですがよろしく願いします。まずは主人公と神様の出会いです。

## 最強の厨二病爆誕

俺はいつのまにか真っ白な空間にいた。

なぜここにいるのか…

俺は確か病院で死んで…つてことはここは天国か。

「ということは、あれができるじゃねえか!!」

俺は立ち上がり構えた。

「我が前にて歴史が終わり、無の創世記が幕を開ける…ジエネシス・ゼロ!!!!」

俺は叫んだが、何も起きない…

「ハハハハ!!!! やっぱ人がいないとやりやすくていいわ!」

そう…この通り俺は変な奴である。属性は厨二病。ちなみにさっきのせりふは、連載中の漫画フェアリーテイルに出てくる敵が切り札出す時に言ったせりふ。

「天国だか地獄だか知らねえが、これでやりたい放題だぜ!!」

俺は生前にはないほどのハイテンションで喜ぶ。

「ゴホンッ!!」

いきなり大きな咳が後ろから聞こえた。恐る恐る振り向くと…

「まったく…さすがにうるさいぞ! 静かにせんか!!」

そこには推定年齢10歳の女の子が立っていた。

「すみません。ついつい一人だけだと思い込んでしまっ…えっと、どちらさま？」

そう言うとなりの子はため息をついて言った。

「……………おぬし、ここが天国とわかっているのなら、なぜ我が神だとわからぬのだ？」

……………はい？

「えっ、神様って仙人みたいなおじいちゃんが天使の輪ついているのじゃないの？」

「さっき変なポーズとって変なことを口走っていたおぬしに言われたくない!!」

神様が顔を真っ赤にして言う。  
「ありゃりゃ、神様ご立腹だわ…」

「すまん、すまん。とりあえず、神様はなんで俺に用があるんだ？」

俺が謝るとすぐに神様は機嫌を直し、落ち着いた声で言った。

「ふむ。おぬしは短い人生で終わったからな。今から好きな世界に転生させようと思う。感謝するが良い」

「マ…マジか!?!?ありがてえ…好きな世界ってことは漫画やアニメ

の二次元世界でもいいのか？」

「もちろんじゃ。おぬしが望む世界ならどんな所でも転生してやる」

「じゃ…じゃあ、ネギまの世界でいいか？」

「ほう…なぜその世界に？」

「あの漫画って前半はほのぼのしているけど、後半になると話しが重くなって主人公10歳なのにめちゃくちゃ苦労するだろう？だから少しでも助けてやりたいんだ」

「ふむ。おぬし、厨二病で馬鹿なのにいい奴じゃな」

「せっかくいいこと言ったのにそんなこと言わないでくれ…正直傷ついた」

俺は床に倒れる。

「す…すまぬ！まさかここまで落ち込むとは…おい、しっかりせい！」

俺は神様の手を借りて立ち上がった。

「……厨二病は打たれ弱いんだ……」

「そ…そうなのか……」

「……………」

「……そ、それより!!」

重い空気に耐えかねた神様が元氣良く振る舞う。

「そのネギまの世界に行くからには何かしらの能力が必要じゃろう  
…そこでじゃ! おぬしにそれを含めた願い事を三つ叶えてやろう」

「今宵…冥王が降臨する…」

俺、即復活。

神様はそんな俺に完全に呆れていた。

「さっきまで立ち上がることさえできなかった者が、途端に復活し  
おって…まあ、よい。それで願い事はどうするのじゃ?」

「まずは…これだ!!」

つと俺はポケットから携帯を取り出し操作した後、神様に画面を見  
せた。

すると神様は困惑した顔で言う。

「何じゃ、これは?」

「それは俺がフェアリーテイルで好きな魔法をまとめたメモさ。そ  
れらの魔法を使わせて欲しい」

「…………やはり痛いことをしているのう」

神様は直球で言ってきた。

「ごめんね、ごめんね…痛くてごめんね…」

つと言つて俺はまた倒れる。

「すまぬ、すまぬ！！我が悪かった！！」

神様はこれ以上面倒なことにならないように俺をなだめる。

「こ…これで願い事は二つじゃ。よく考えるんじゃな。」

「じゃあ、不老不死で」

俺は何事でもなかったように起き上がった。

「……即答じゃな……」

神様は呆れて言う。

「わかった。では最後の願い事じゃ。これはよく考えるんじゃぞ」

「決まったぜ」

俺は即効答えた。

神様はそんな俺に呆れてため息をついた。

「……おぬし、ちゃんと考えたのじゃろうか？いくらなんでも早過ぎるぞ？」

「ちゃんと考えたさ」

俺は少し間をおいて言った。

「俺を原作が始まる600年前に転生させて欲しい」

「なっ!？」

神様は目を見開いて驚いた。

「ちょっと、ある吸血鬼少女がどんな過去を歩んだのか…知りたくてな。それに俺、人生短かったからもっというんなことを経験したい」

「……なるほど。おぬしが望むのならよからう。ではおぬしの願い事は

- 1、自分の好きなフェアリーテイルの魔法を使用可能にすること。
  - 2、不老不死にすること。
  - 3、転生は原作が始まる600年前にすること。
- これで良いか？」

「ああ、頼む」

俺は拝むように言う。

すると神様が突然

「ちょっと、おぬしに聞きたいことがある」

つと言ってきた。

「ん？なんだい？」

俺が答えると神様は怪訝な顔して

「転生するから今までの記憶がなくなってしまうだが良いのか？」

「しまったアアアア！！願い事に入れるの忘れてたアアアア！！！」

俺は頭を抱えて叫ぶと神様は

「安心せい。特別に記憶はそのままにしてやるう」

俺はその言葉を聞いて叫ぶのをやめた。

「えっ、いいのか？」

「ふむ。なんだかおぬしと話していて楽しかったからな。そのお礼じゃ／＼」

神様は満面の笑みで言った。そんな神様を見て俺は可愛いと思ってしまった。

「そ、そんなに楽しかったのか？」

「ふむ／＼我は一人じゃ。たとえ話したいと思ってても話せぬのじゃ……じゃからこんなに誰かと話したのは久しぶりじゃ／＼」

「でも、ここは天国なんだろう？ だったら死んだ奴と話すことぐらいできないのか？」

「厳密に言つとここは我が造りし異空間：天国は別の場所じゃ。我

は神じゃ…迷う魂を天国へと案内しなければならん…」

そんなことを言った神様はどこか寂しそうだった。

「それに神は人間などの他の生物とは接触してはならん。たとえ魂でも…」

神様の顔は今にも泣きそうなただの女の子に見えた。

俺は神様の所まで歩み寄り、優しく彼女の頭を撫でた。

「はうツ！？／／」

神様は驚いたのか声をあげた。そんな神様に俺は言う。

「……………神様はこんな俺にいろんなものをくれた…この恩は一生忘れねえ…だから約束する…俺がまた死んでここに来たら、こんな俺でもいいなら、いつでも話し相手になってやる！！その時、もし強制的に天国行きになっても、ここにへばりついて神様の話を聞いてやる！！」

俺は彼女の頭から手を離れた。

「受けた恩は必ず返す…それが俺の厨二道だ」

彼女は涙目の目を擦った後

「厨二病で馬鹿であるおぬしなんか、神である我の話し相手など勤まるものか」

そんなことを言った彼女だが、その顔は嬉しさに満ち溢れた笑顔だ

った。

「それでは行くがよい！人間よ！！」

神様が叫ぶと床から巨大な扉が現れた。

「でっけエエエエエエ！！！！」

俺はあまりにも大きな扉に絶叫する。  
扉はゴゴゴゴと開いた。

「さあ、行くのじゃ！！」

つと言つて神様は俺の背中を押す。

「待て待て！！肝心の魔法や不老不死の能力もらつてねえぞ！！？」

「大丈夫じゃ。もうつけといた」

「マ…マジで！？」

「試しは向こうに行つてからじゃ！さあさあ…つてちょっと待つ  
のじゃ！！」

今度は俺の服を引っ張つて歩みを止める。

「ど、どうしたんだ？」

そう答えると神様は少し頬を赤く染めて

「……………おぬしの名は何じゃ？」

「俺か？俺は富堂匡介だ」  
フドウキョウスケ

「富堂…匡介…覚えておくのじゃ／＼」

そして、俺は扉の前まで着いた。

「約束は…必ず守る…それまで元気でな！神様！！」

俺が手を振った後

「おぬしも元気でな！！…匡介！！／＼」

神様も手を振ってくれた。俺は笑顔で手を振る神様に照れながら、扉をくぐった。

## 最強の厨二病爆誕（後書き）

主人公、いきなりフラグ立てたような…しかも相手は幼女神様…  
いきなり暴走していますがよろしく願います。次回は主人公の  
魔法などの紹介の話しになります。

ネギま！の世界に到着。 だけど、ここどこ！？（前書き）

二話です。 かなり短いですが、読んでみて下さい。

ネギま！の世界に到着。だけど、ここどこ！？

「さてと、ついに来たか。ネギまの世界…」

俺はそう言った後、大声で叫んだ。

「ククク…俺はこの時を待っていたんだ！…ずっと待ってたんだ！  
！」

厨二病モード発動。

「この富堂匡介…いや、このハデスが！…この世界を冥界へと落としてやる…手始めにまず魔法の確認をと…」

俺は全身に魔力を込めた。

「闇刹那！！」

俺は魔法名を唱えると、自分の周りが瞬時に闇に覆われた。

「おお！スゲエ！！」

さらに魔力を込める。

「<sup>シェイド</sup>幽兵！！」

また魔法名を唱えると今度は大量の骸骨が現れた。

「ヤベエ！マジで魔法使ってるんじゃない！！んじゃ、あの岩壊して

みるか…デッドウェイブ……！！！！」

俺は地面に両手を突き、怨霊を飛ばして岩を粉碎した。

「ホントやべえな…この破壊力は…あれもやってみるか！」

俺は魔力を込めた右手を突き上げた。

「ダークロンド  
常闇回旋曲……！！！！」

右手から十以上の怨霊を飛ばして近くにあった木々を薙ぎ倒す。

「ハハハハ……おもしれえ……！！！！ダークカプリチオ  
常闇奇想曲……！！！！」

今度は左手から螺旋巻く光線を発射して、近くにごろごろある岩を次々と破壊する。

「シメだア……ダークグラビティ……！！！！」

俺は両手を地面の方向に向けると、ズゴン……と大きな音がして地面に巨大なクレーターができた。

「……………少しやり過ぎたか」

辺りを見渡すと俺の攻撃魔法でほとんど荒れ地と化していた。

「ん？そつえば人、いなくね？」

もう一度よく見渡すが人影もない。

「ああ、そうか。ここは森か…だから誰もいない…ってだからここどこ!？」

ネギまの世界に降り立ったのはいいが、肝心の自分の居場所がわからなかった。

「クソオ…ってことは現実世界なのか魔法世界なのかもわからないのか…神様に場所を指定すればよかった…神様アアア!!ヘルプ!ヘルプミイイイ!!!!!!」

俺は絶叫したが、何も起こらなかった。

「……………とりあえず、ぶらぶら行くか……………」

俺はあてもなく、トボトボと歩いて行った。

ネギま！の世界に到着。だけど、ここどこ！？（後書き）

今回はここまでです。次回から超展開します。

「完全なる世界」所属魔導士、冥王（ハデス）（前書き）

更新遅れてしまいました。申し訳ありません。

こんな感じでやっていきますので、温かく見守って頂けると嬉しいです。

では、本編をどうぞ。

「完全なる世界」所属魔導士、冥王（ハデス）

ある青年が異界に降り立ってから600年の時が流れた。

ここは廃都オステイアにある墓守りの宮殿。かつて黄昏の姫御子がいた聖地。そこに宮殿から外を眺める一人の男がいた。男は赤いタートルネックに黒いハッピを着て、下にはジーパンを履いている地味な男だった。特徴といえば右目を包帯で覆っているところだけだ。そんな男のところに一人の少年が現れた。白髪の少年は不思議そうに男に尋ねる。

「こんな所で何をしているんだい？」

男はゆっくりと答えた。

「いや、たいしたことじゃねえけど、世界が生まれ変わる前に今の世界を目に焼き付けようと思ってな」

「こんな世界に何か未練でも？」

男は苦笑いで言った。

「こんな世界でもいろいろと世話になったからな。忘れねえように思っ」

少年は男の答えに鼻で笑う。

「フ…あなたらしいね」

少年が言った後、遠くから声が聞こえてきた。

「フェイト様アー、匡介様アー、夕食ができましたよ」

声の主は猫耳の少女だった。白髪の少年、フェイトは少女の言葉に答える。

「うん。今行くよ、暦さん」

猫耳少女の名は暦。<sup>「ミミ」</sup>昔、フェイトに助けられた少女の一人である。フェイトに命を救われた恩に報いるため、自分とは違う救われない人達のため、完全なる世界の完成を目指している。<sup>「スモ・エンテレケイア」</sup>

「了解、暦。あと俺は匡介じゃない、世界を混沌の闇へと突き落とす者、ハデスだ」

フェイトと話していた男もとい匡介（ハデス？）は暦に敬礼するように手を動かして言った。

そんな匡介に暦は苦笑いで

「おかしなことを言っていないで早く行きますよ、匡介様！せっかくのご飯が冷めてします」

そう言った暦はフェイトともう歩いていた。

「悪リイ、悪リイ。お前らが作ったご飯おいしいからな。冷めちまったらもったいねえもんな。それと俺は匡介じゃない、ハデスだ」

匡介はフェイト達に追いついた後、そう言って暦の髪を撫でた。

「にやにや！？／＼そ、そんな褒めなくても…／＼」

「いや、そんなことないよ、暦さん。君達の料理はいつもおいしいよ。感謝してる」

フェイトも暦の髪を撫でる。

「にゃ！？／／にゃにゃ／／／／幸せ過ぎて死にそうだにゃ／／／／」

幸せそうに悶える暦を見て匡介はハハハと、フェイトはフツと笑った。

それから三人は談笑しながら食堂に向かった。食堂に着くと、

「『お帰りなさいませ！』『』『』」

と、四人のメイド服を着た少女達が待っていた。

ツインテールで釣り目の少女、ロングヘアーで角のような耳を持ち眼を閉じている（見えているのか？）少女、ウェーブ髪でエルフ耳の亜人の少女、色黒で、額にハートマークのような紋章を持つ少女と一人一人特徴が異なるが、共通点としてみんな美少女だった。

その美少女達のそばの長テーブルに美味しそうな料理が一人分ずつ並べてある。

「ご苦労様。それじゃあ、早速食べようか」

フェイトがそう言って椅子に座ると、それに合わせて匡介達も席に着いた。

各自「いただきます」と言い、料理にかぶりつく。

「うめえ！やっぱりうめえぜー！」

「ハデスさん」

美味しそうに料理を食べる匡介にフェイトは言った。

「ん？どうした？」

「次のゲートポート破壊にあなたも参加して欲しいんだ。ちょっとあちら側に厄介な人がいてね…」

フェイトの言葉に匡介は眼を細める。ちなみにフェイトが言った「あちら側」とは摩帆良学園の3年A組の生徒達と魔法先生ネギ・スプリングフィールドによる一派のことである。

「ほう…フェイトが他人に興味を持つとは珍しいね…」

匡介の言葉に眼を閉じている少女、<sup>シラベ</sup>調が反応した。

「フェイト様、何か問題でも？」

「いや、たいした問題ではないと思うけどね。ちょっとしたイレギュラーが存在しただけだよ」

そう言ったフェイトにウェーブ髪の少女、<sup>シオリ</sup>栞は尋ねた。

「黄昏の姫御子の完全魔法無効化能力ですか？」<sup>マジックキャンセル</sup>

「確かにお姫様の能力も脅威だけど、まだ完全に力を引き出してないからそんないしたモノじゃない」

「では、一体誰なのでしょう？」

フェイトの次の言葉を促すようにツインテールの少女、焔<sup>ホムラ</sup>は言った。  
フェイトはコップに入った珈琲を一口飲んだ後言った。

「この前、リヨウメンスクナノカミを復活の時に、あの英雄の息子に邪魔されて失敗したのはもう話したよね？その時、英雄の息子の仲間に『サトナカユイ』という女の子がいたんだ。その人にはこっぴどく邪魔されてね。僕でさえも齒が立たなかったよ」

「ええー！？フェイト様がつ！？」

暦は驚いて椅子から立ち上がった。他のメンバーも信じられないという顔をしている。ただし、匡介は片眉を上げただけだった。

フェイトはそんな彼らに構わず話しを続ける。

「彼女は『魔法を粉々にした』から、なんらかの能力を持っていることは確かなんだけど、正体が分からない。そこで、転生者として600年の時を生きたハデスさんにその相手をして欲しいんだ。」

フェイトは真剣に匡介の眼を見つめた。

フェイトがなぜ匡介が転生者ということを知っているのかは、フェイト達に初めて会った時に匡介自身が自分のことを全て話したからだ。

「……了解。協力するぜ！！ただし、条件がある」

「条件？」

フェイトは匡介の言葉を聞いて片眉を上げた。

「月詠を雇うのはやめてほしい…そうすれば、協力する」

「月詠さんを？なぜ？」

「アイツの戦闘狂はヤバイ…俺達は血を流さずに目的を達成する方針のはずだ。ヤツがいると計画に支障が出る…そう思わないか？」

匡介に尋ねられたフェイトは考え込む。 匡介はさらに念押しで言った。

「それに、月詠の空いた穴は俺で埋められる。どうだ？」

フェイトは珈琲を一口飲むと言った。

「いいよ。そのかわり、ちゃんと働いて貰うからね」

「了解！！」

匡介はフェイトに敬礼した。

「フェ、フェイト様！！」

暦がフェイトに近づいて言った。

「私も行きます！！さっきの話しの通りなら、フェイト様が危険です。私もゲートポートに行かせて下さい！！」

「そうです。一人でもいた方に越したことはないです。私達も連れていって下さい」

焰もフェイトにお願いし、フェイトガールズ全員がひざまづく。

「……気持ちは嬉しいけど…君達はここにいて欲しい。肝心のアジドがから空きじゃ、元も子もないからね」

彼女達は少し残念な顔した。

「さあ、食事を続けよう」

フェイトがそう言うって彼女達を促し席に座らせた後、匡介はまた料理にかぶりつくのだった。

夕食後、匡介は焰達の皿洗いの手伝いをしていた。

食事の用意もしてくれた彼女達を後片付けも任せるのは匡介の性分上、申し訳ないと思うので皿洗いは手伝っている。なぜ手伝いなのかというと、前に皿洗いは全部自分一人でやると言ったら、それはダメですとフェイトガールズに猛反対されたので現在はみんなでやる形になっている。

ちなみにフェイトはいない。

匡介はいつも通り皿を洗っていると突然、隣で皿を洗っていた焰に声をかけられた。

「匡介様。フェイト様は私達のことを邪魔なのでしょうか…」

「は、はい!？」

匡介はあまりにも衝撃的なことを聞かされたので、洗っていた皿を落としそうになった。

「な、なんでそう思うんだ？」

「フェイト様はあまり私達に頼ってくれないのです」

同じく皿を洗っていた暦が言った。

「なのにフェイト様は匡介様みたいに他の人ばかり頼る…私達じゃなくて…」

栞が悲しそうに言った。

「……なるほど。だいたい分かった。つまり、焰達はやきもちまたは嫉妬してるわけだ」

匡介はサラっと言った。

対して焰達は微かに頬が赤くなっていた。

「俺が思うにたぶん、フェイトは焰達を危険な目に遭わせたくないんじゃないの？」

「えっ？」

調が不思議そう匡介の顔を見た。

「それにフェイトがそんなふうに思うヤツじゃないぜ？俺なんかより焰達の方がアイツと付き合いが長いんだから、一番分かっているとはずだけどな」

「……！！！」

「俺が言うのもあれだけど、フェイトはお前達を邪魔なんて思って

いねえよ。フェイトにとってお前達かけがえのない仲間だよ」

「……私達は命を救ってくれたフェイト様を疑ってしまいました」  
焰が悲しそうに言う。

「まあ、お前達の大將は無愛想だからな。俺からも言っとくよ。あと、今度の作戦は俺に任せろ。焰達の大將は必ず護る」

匡介は焰の髪に手に置いて撫でた。焰の顔が赤くなる。

「約束だ。必ず護る」

匡介はそう言つて焰の頭から手を離すと、

「さあ、皿洗いちゃちゃっと終わらせようぜ」

「「「「はい!!」「」「」」」

匡介とフェイトガールズは再び皿洗いを開始した。

しばらくして、皿洗いが終わった匡介は部屋に戻ろうとした時、声をかけられた。声の正体は今まであまりしゃべらなかつた額にハートマークのような紋章を持つ少女、環<sup>タマキ</sup>だった。

「環ィ…もう少ししゃべらないと、小説的にダメだぞ」

何の話をしているだろうという感じで首をかしげる環。匡介は不覚にも可愛いて思ってしまった。

「今日はありがとうございました。相談に乗ってくれて」

「ああ、俺は話し聞いて勝手に意見を言っただけだぜ？」

「これからもよろしくお願いします……おやすみなさい／＼」

「ああ、おやすみ」

匡介は環と別れて部屋に戻っていった。

「完全なる世界」所属魔導士、冥王（ハデス）（後書き）

ついに次話、匡介が原作ブレイク開始。

そして、新たな転生者が！！次話は必見です。

次話、「正義の転生者」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8625y/>

---

魔法先生ネギま! ~FT厨二病降臨~

2011年12月21日21時50分発行